読書

土曜掲載

時空超えた遥かなる対話

須賀敦子の方へ　松山　巌著

いま、須賀敦子の文学が静かなリバイバルを迎えている。「須賀敦子ふたたび」と題されたムックが出たり、著書が文庫化されたり。横浜では彼女の展覧会も開かれる。そして、生前の須賀と親交の厚かった著者による、読者の心をまさに「須賀敦子の方へ」と向かわせる本書が出版された。

本書は須賀敦子の晩年にまつわる思い出や彼女のエッセーからの引用を随所にちりばめながら、子ども時代から24歳でフランスに留学するまでの若き日々を集中的に扱っている。評伝と呼びたいところだが、趣は多少違うようだ。

手紙、人々の証言、彼女が読んでいた本、歩いていた地域。丹念に須賀敦子を追跡、追憶し、その姿を再構成しようとするなかに、著者の現在が強烈に刻印されてもいる。時空を超えた須賀敦子との遥かなる対話が、現在進行形で続けられているように見える。

須賀敦子はその端正なエッセーによって1990年代、大いに注目的となったが、病魔に倒れ、活躍できた時期は短かった。没後、全集が出版されたが、その編集にもあたった著者は、本書のなかで須賀の叙述をなぞるだけではなく、彼女が書かなかったことにまで推理をめぐらしている。

例えば、森鷗外の史伝「渋江抽斎」をめぐって、須賀父娘の間にどのような気持ちのやりとりがあったのか。須賀敦子が庄野潤三の小説「夕べの雲」に「本能的に」惹かれ、それをイタリア語に訳した理由は何か。ナタリア・ギンズブルグの「ある家族の会話」と須賀のエッセー集には、どのような呼応関係が見られるか。そして、戦後、カトリック学生連盟の活動に参加しながら、彼女が考えていたこととは…。

著者が須賀敦子に聞いてみたかったであろう、たくさんのことが、本書には詰まっている。そのように何年間も向き合い続けられる作家を持つことの幸せを思う。いろいろな須賀敦子の姿が、見えてくる本だ。

（松永美穂・早稲田大教授）

（新潮社・1944円）

思考実験で描く一族の傷

プロット・アゲンスト・アメリカ　フィリップ・ロス著、柴田元幸訳

本書のタイトルは字義どおりには「アメリカに対する謀略」だが、同時に「アメリカ史改変」のニュアンスも含む。

その前提を成すのが、史実では1933年から45年までの12年間、建国以来最長の任期を務めた第32代大統領フランクリン・デラノ・ローズヴェルト大統領が、仮に4選せず対抗勢力に惨敗していたら?という思考実験である。

ローズヴェルト大統領は大恐慌にあえぐ30年代アメリカをニューディール政策により救い出し、第2次世界大戦勝利をお膳立てして絶大な支持を得た大統領だが、2004年に原著が刊行された本書では、彼は1940年、3選を懸けた選挙のさいに、ナチスドイツと親しく反ユダヤ主義思想を持つ有名飛行家チャールズ・リンドバーグに敗北を喫してしまう。

その結果、アメリカは連合国側ならぬ枢軸国側、すなわち日独伊などファシズム諸国家との連携を深め、国内のユダヤ人共同体内部に決定的な亀裂が走る。すなわち、あくまで民族的名誉を死守する者がいる一方、自民族を裏切り新政権へ寝返る転向者も後を絶たなくなるのだ。

中心となるのは作家の自伝的背景とも無縁ではないユダヤ系一家。何しろ語り手自身が名をフィリップ・ロスという。

40年6月の時点で7歳の彼やその兄サンディ、いとこのアルヴィンたちが、リンドバーグ大統領誕生以降の2年間でいかに人生の傷を負っていくかを、本書は生き生きとしたリアリズムで描き出す。特に飛行家として人気絶頂だったリンドバーグの愛息誘拐事件に驚くべき真相があったとする仮説、やがてリンドバーグ大統領自身が誘拐される展開は、手に汗握る。

ヒトラー打倒の野心に燃えて従軍したアルヴィンが片脚を失い帰国して以降の変節は惨憺たるものだが、しかしその精神的外傷についても物語は終盤、あまりにも美しいクライマックスを仕掛けている。傑作。

（巽孝之・慶応大教授）

（集英社・2376円）

死に至る謎、鮮やかに解く

誰が星の王子さまを殺したのか　安冨　歩著

本書は「星の王子さま」の謎を鮮やかに解き明かす。第2次世界大戦中、サンテグジュペリがナチスから逃れて米国に亡命し、アフリカへ志願出征する直前に発表された「星の王子さま」は、政治的な意味も含め、さまざまな解釈を生んできた。しかし、謎めいた登場人物はなかなかその〝真のメッセージ〟を明らかにしてくれない。

本書ではこれまでに繰り広げられた解釈を覆すような議論が展開する。小さな手がかりを糸口に切り込んでゆくその手法は見事というほかない。副題にもある「モラル・ハラスメント」とは、一見無害なコミュニケーションを装って人の心を支配し、かつその苦しみは自身のせいだと誤信させる精神的暴力。それは夫婦や恋人、親子、友人関係、また会社や国家と個人の間にも忍び込み、人間の魂を奪う。ハラスメントにとらわれたとき、人間は自らの魂の主人であることをやめてさまよい、そしてそのさまよいを「自由」であると取り違える。王子の苦悩はここにあると本書は言う。

秀逸なのは「飼いならす」という言葉に込められたトリックを明らかにした点である。気難しいバラに振り回される王子。本来はバラが王子の心を支配し、飼いならしたにもかかわらず、キツネは王子がバラを飼いならしたとし「飼いならしたものに対して責任がある」と王子を追いつめる。

次に「ウワバミにのまれたゾウの絵」を手がかりに、王子を死に追いやったハラスメントの悪意が隠蔽されていることを指摘する。そして、作中で重要な役割を果たすバオバブの木の新たな解釈が示されるにいたって、本書は意外な一貫性をもって結論を導き出す。王子はなぜ自分の星を去らねばならなかったのか。自由に旅をしているはずの王子はなぜヘビに自らをかませて倒れたのか。その謎を解く旅を、夜空の深い色と星に彩られたこの美しい本とともに味わってほしい。それはわれわれ自身のとらわれを解く旅でもある。

（深尾葉子・大阪大准教授）

（明石書店・2160円）

複雑怪奇、謎解きで描く怪物の姿

大野更紗、開沼博著

「3・11」の2人が難病、福祉、原発、マスメディアなど「今」を語る時、避けては通れないとがったテーマをスペシャリストと語り合う。

「（難病患者は）ずっと被災しているようなもの」だが「ふつうに生きられるんだ」と言い、原発をめぐる状況を「変わらない」と突き放しつつ突破口の模索を諦めない。その姿勢が頼もしい。

（講談社・918円）

岡田秀文「黒龍荘の惨劇」（光文社・1836円）は、探偵の月輪龍太郎と友人の杉山潤之助が難事件に挑む時代ミステリーの第2弾。

元首相の山縣有朋の漆原におびえ、被害者は漆原の故郷に伝わるわらべ唄に見立てられ、首や手足を切断されるなど、物語は本格ミステリーの王道ともいえる道具立てを使いながら進む。

本当に解決するのかと思ら浮かび上がるのは、法律やモラルなど歯牙にもかけない怪物の存在である。この怪物は、現代とも共通する虚無を象徴しているようで、背筋が凍るだろう。

6月、「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界文化遺産に登録された。羽田空港「深

死体が密室状態の石炭小屋で発見され、友人のいとが失踪する事件が発生した。事件とテロの関係を疑う政府は、桐野警部を現地に派遣。第一発見者になった尾高惇忠工場長の娘、勇も事件を調べ始める。

事件には、技術指導をするお雇い外国人への偏見や、明治維新という時代の激変によって各[illegible]

@BOOK カフェ

猪苗代町生涯学習課
社会教育指導員
安部　なかさん

磯田道史著「無私の日本人」

私は歴史上の人物、その時代に実在した人の生活、出会った人々や、その人を通して見える時代の風景、生き方に触れたくて本を読みます。この本は「穀田屋十三郎」「中根東里」「大田垣蓮月」の3人について書かれています。

著者のあとがきには、「本当に大きな人間というのは、世間的に偉くならずとも金を儲けずともまんが少しでもいい」とあります。

ぶられる一冊

した。

特に江戸

垣蓮月は数

れながら

清く堂々

した女性

つもボロボ

くるほど、

が揺さぶ

気が狂った

な事が次々

は、蓮月の